

古代史に遊ぼう

第 34 回 -伯耆・出雲へ遠征(その2) -

遠征の第 3 日、出雲「意宇（おう）」での目覚めはさわやかであった。盛り沢山の見学予定をこなすため、朝食後は早立ちである。熊野大社の背後の山に分け入る道を北上し、古代もかくあったかと思われる風景の中をしばらく走ると、鄙びた須我神社があり参詣する。古事記に「八岐大蛇を退治した素盞鳴尊と奇稲田姫命は出雲国須賀の地に至り、美しい雲の立ち昇るのをみて、“八雲立つ 出雲八重垣 つまごみに 八重垣つくるその八重垣を”と歌った」とある。この歌は日本で最古の和歌、また「出雲」の国名の語源という。同じ和歌の碑は八重垣神社、熊野大社にも建てられていたが、そのあたりの細かな事情は詮索しないことにする。

山中とはいえ良く整備された道を宍道湖方向に北上すると玉造温泉に至る。まず、石段を登り玉作湯神社へ参拝する。勾玉造りの神・櫛明玉命、そして大名持命と少彦名命の各地の有名温泉を開発・守護している温泉コンビが祀られている。境内の「願い石」と「叶い石」は若者に人気のパワー・スポットである。川辺の温泉街を通り、丘に登ると史跡公園と出雲玉作資料館があり、背後の花仙山は宝玉の原石（めのう）を産出するという。史跡には推定復元された工房、古墳などが整備されている。資料館には史跡出土の重文指定・玉の未製品、砥石などが展示されているだけでなく、玉作りの制作工程、日本全国各地の玉作跡の出土品と原石（こはく、碧玉）を見ることが出来る。

いよいよ西へ、今回遠征の目玉である二つの遺跡へと向かう。発見年代とは逆順になるが、まず加茂岩倉遺跡である。銅鐸出土地の傍らに建設されたガイダンスの近くまで車で駆け、足弱の年寄りは大助かりである。この施設は遺跡の高さに合わせて橋状に造られており、内部に遺跡の解説パネルや銅鐸のレプリカの展示がある。ここで出土銅鐸の予備知識を得た後、農道工事で掘削された斜面に設置の栈道から遺跡を見て歩く、発見時の状況を復元したという現場では約 2000 年前の銅鐸が初めて姿を見せたときの有様を観察できる。



● 加茂岩倉遺跡 ガイダンス棟



● 荒神谷遺跡

丘を下り斐伊川の支流赤川に突き当たると対岸に景初 3 年銘三角縁神獣鏡が出土した神原神社古墳がみえ、川沿いを少し走って北へと山道に分け入り、近道を荒神谷へと向かう。舗装のない全くの山道は幸い長くは続かず、程なく良い道に出ると荒神谷史跡公園である。公園に入って右手に荒神谷博物館があり、南に 5 分ほど歩いた神庭西谷の南斜面が銅剣・銅鐸・銅矛の出土した遺跡である。古代の小道の入り口には調査員が一片の須恵器を拾ったことが、この遺跡を発見の端緒となったことを記した記念碑と「須恵器破片」が展示されている。遺跡を丹念に、博物館をざっと見学して、出雲市へ向かう。JR 駅に近い高瀬川の柳並木から路地に入った出雲そばの名店「そばの加儀」で、伝統の味を伝える出雲蕎麦におおいに満足する。

再び、斐伊川の流に近づき、西谷墳墓群史跡公園を訪れる。ここには時代によってタイプの異なる墳墓が多数あるが、弥生時代後期から終末期に作られた墳丘墓は四隅突出形を成し、出雲圏特有の王墓として注目されている。4 号墓と 3 号墓の突出部分から墳丘に登り、あたりを眺めてその大きさに感心する。ここの出雲弥生の森博物館には、発掘された西谷 3 号墓の出土品をはじめ最近の発掘成果まで展示されていると云うことであるが、残念ながら先を急ぐために割愛せざるを得なかった。

島根半島の西端である日御碕をめざして急ぐ、日御碕神社では「神の宮」に素盞鳴尊が、「日立宮」に天照大神を祀っている。参拝の後、灯台へと向かうドライブウェイの途中、日本海の青と松林の緑を背景として見える「神社」の朱の楼門・神殿は竜宮城のようであった。出雲日御碕灯台は建設後すでに 100 年以上を経ている。地上より頂部まで 43、65m で日本一高い耐震構造、今も日本海を夜間航行する船舶に 20 秒間に白閃光 2 回と赤閃光 1 回を送り続けている。今回は灯台までは行かず、駐車場から遠望して引き返した。



● 西谷 四隅突出型墳

日御碕から海に沿った道を南に走る途中、「石見の仙人」が「ここあたりで、とっておきの景色を皆さんに紹介する」といいます。車を展望のポイントに停め、南に広がる海とそれを隔てた遠景を眺める。南西にうつすらと見えるのが三瓶山、南に白く直線状に見えるのが園の長浜で、これらが神話「國引き」の風景であるとの説明。八束水臣津野命（ヤツカミズオミミツ）が國引きで杵築の岬の一带を引いてきたとき綱を掛けた杭が三瓶山、その綱が園の長浜となったという。そういわれてよく見るとそのように見えるのが神妙である。帰ってから、「國引き」神話を読みなおし、この地の写真を見直すと、一寸靄っている恨みはあるが神話の雄大さを彷彿させ、お国自慢の域を越える風景に感服した。



● 日御碕神社 楼門

帰宅する石見の友を最寄りの山陰線江南駅まで送る。鄙びた駅でディーゼル車輛を見送るなどは、久しぶりのなつかしい経験であった。そこで、もう一人も急用で呼び出されて急遽帰宅することになり、人数は5人となる。今宵の宿は神西湖畔の国民宿舎で名も「くにびき荘」である。温泉につかり、人数は減っても賑やかに夕食を楽しみ、早寝をする。



● 神西湖の朝陽

最終日は日の出を見ることから始まった。日本海側には夕陽の沈むのを見る名所は多いのだが、この宿は神西湖に面して東南を向いているので、湖の彼方中国山脈から昇る朝日がなかなかの眺めである。ゆっくり朝食を済ませ、土地の名産も物色して、おなじみになった道を出雲大社に向かう。教えどおり、二拝四拍手で参拝、式年遷宮で新しくなった社殿などを拝観する。車で古代出雲歴史博物館へと移動する、この博物館へは3度目であるが、いままではじっくりとは見学できなかった。今回はこの遠征のまとめとして時間を掛けて見る事が出来、これまでの未練を晴らすことができた。

まず神話シアターで出雲神話の映像を眺めウォームアップをする。出雲が日本民族揺籃の地、神話のふるさとであることは、神話における出雲系の重要性和完全「出雲国風土記」の独自性からみて明らかである。そしてこれらの神話が単なるお伽噺ではないことが、近年の考古学的発見によって、裏付けられてきた。近畿を中心とする銅鐸文化圏と北九州を中心とする銅剣・銅鉾・銅戈文化圏の二大文化圏は和辻博士の提唱以来、現在も学説として有力である。出雲の荒神谷・加茂岩倉の両遺跡から記録的に大量な銅剣・銅鐸・銅鉾が出土したことにより、出雲がこの二大青銅文化圏のたんなる接点ではないことがいまや明らかとなった。また1999年以降おこなわれた、出雲大社の境内遺跡調査で検出された巨大な柱群は970年の文献に記載された「雲太」出雲大社が高さ第一であったことを裏付け（和二、東大寺大仏殿、京三、大極殿）、巨柱に付着した赤色顔料は歌謡・記録で出雲大社を「八百丹」と形容している事に合致する。日御碕神社史跡公園で見た方形あるいは長方形の墳丘で四隅が突き出ている四隅突出墳丘墓は出雲を中心に分布している。その伝統が形を変えながら方形墳をベースとして出雲の古墳文化は展開している。古代出雲の文化は北陸・北九州・朝鮮半島などとのつながりを背景に日本海文化圏の中核として形成された。そんなことを頭に、展示されたあまたの遺宝をゆっくりと眺めて、簡単には整理できないが得るところ大であった。



● 国引きの風景 下の写真は長浜の一部



定時となり、JR 出雲市駅前でレンタカーを返却、銘々昼食をとり土産物を買ひ、出雲市発の高速バスに搭乗、大阪を目指す。中国道の難所、西宮・宝塚間での事故渋滞のため、新大阪駅に約1時間遅れで到着、解散して無事家路についた。

本旅行の名幹事であり、撮影された写真の転載を許可頂いた吉本吉彦氏に感謝いたします。

(岡野 実)